

《2015年3月 月例会報告》

賀川さん FIFA 会長賞受賞記念講演会

「マイ・フットボール・クロニクル 1924-2015」

賀川 浩 (スポーツライター)

【日 時】2015年3月25日(水) 19:00~20:30 講演会
20:30~ お祝いパーティ

【会 場】フットボールサロン 4-4-2

【演 者】賀川浩 (スポーツライター/NPO 法人サロン 2002)

【参加者(会員・メンバー)12名】阿部博一、安藤裕一、本多克己、牛木素吉郎、小池靖、菊地悟、梅本嗣、小池正道、徳田仁、中塚義実、谷口昭彦、佐藤一朗

【参加者(未会員)10名】槇野晋司、原田秀樹、国島栄市、田邊雅之、谷口昭彦、河野遼平、高島正暉、北原由、原陽司、青木伸彦、藤村孝平

【概 要】

NPO 法人サロン 2002 の会員の賀川浩さんが FIFA バロンドール授賞式において、日本人で、またジャーナリストで初めて FIFA 会長賞を受賞されたことを受けて、東京・神戸の 2 会場で記念講演会を開催した。

東京では「ユースフットサル選抜トーナメント 2015」に合わせて上京されるタイミングで「講演会」を企画。神戸では賀川さんが蔵書を寄託している「神戸賀川サッカー文庫」が設置されている神戸市立中央図書館との共催となった。授賞式の土産話に加え、特攻隊として戦地に赴いた戦時中の逸話などが語られた。

【神戸開催の概要】

テーマ：「マイフットボールクロニクル 1924-2015」

日 時：2015年3月28日(土) 13:30~15:30

会 場：神戸市立中央図書館 2号館 3階閲覧室

定 員：80名(事前申し込みが必要です。)

申込受付：平成27年3月4日(水曜)~3月27日(金曜)

申込方法：1.電話 2.図書館窓口で先着順に受付けます。

注)本報告では神戸開催での講演を採録した

< 目 次 >

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. 大分での代表戦……………p.2 | 4. 蹴球からサッカーへ……………p.4 |
| 2. 決勝トーナメントが消えた……………p.2 | 5. 赤トンボと号隊始末記……………p.5 |
| 3. サッカーの見方……………p.3 | 6. デットマール・クラマー……………p.7 |

1. 大分での代表戦

昨日はハリルホジッチという新しい監督さんが来て最初の試合ということで、ヨーロッパからも選手が皆帰ってきました。「これはぜひ見に行かなければいけない」ということで大分まで行ってまいりました。記者会見で本人が語るのをはじめて聞きました。確かユーゴ系でオシムさんなんかと同じ出身なんですけども、彼がしゃべるのはフランス語ですね。フランス語でしゃべると口が滑らかになるのか、よくしゃべる監督さんでね。昨日の試合の後では繰り返し「満足した」と、「自分が思っている路線で進み始めている」という言い方でしたね。

新監督での試合は初めてですから、選手も監督も緊張するんです。後半からいつもの連中が顔を出したわけですけど、神戸出身の香川真司なんかは途中から入ってきたら、始めから意気込みが違いましたね。いつもより遥かにスピードのある動きでした。彼が本気になればやっぱりうまいですから、チームは前半のチームと後半のチームと全く違う感じになりました。本田圭佑と2人でチャンスを作って、岡崎が1点入れて、真司が相手の股下を抜いたシュートのようなクロスのようなのを出して、それを圭佑が決めましたね。

僕はここのところ香川、同じ名前ですが身内ではないですけども、香川真司がイングランドからドイツに移って、良い時もあれば悪い時もあったので、ちょっと心配しましたが、今日の感じではどうやら戻っただけでなくて少し前より良くなってきているようです。特に昨日のように始めからその気になってやれば、やっぱりうまいなと感じて一安心しました。僕はもともと監督が試合するのではなくて、選手が試合をするんだと思っていますから、いくら監督がどうこうと言っても、選手の方を見るのが昔からの癖なんです。だけど、ひとつひとつのプレーについて、この辺でやめるよりこまめに足を伸ばしたらボールを取れるという時に足を伸ばしたらどうか、ということまできっちり見る監督のようですから選手もその気になってやります。だからあの調子で行けば、少しずつまた選手が伸び始めるのかなという気はしました。

最初にガラッとメンバーを変えて出してきたのは、とりあえずたくさん招集してますから、今まで日本代表として出ていない連中も、どのくらいできるかを見たかったんだろうと思います。中心になる選手は今まで決まっていたんですけどね。今後もそうなるとは思いますが、次の新しい世代が出てくるように彼が仕向けてくるんじゃないかと思っています。もちろんテレビをご覧になってお分かりのように、例えば後半の終わりの頃に内田が出ればやっぱりポジションの取り方とか前に出るスピードとかが違います。そういうところへ新しい選手が加わっていくことによって代表が厚くなるわけですから、当分あの監督さんのやり方がいいんじゃないか見ております。2-0、相変わらずそのあとでももう少し点は取れるはずだったんです。そのへんはこれからも問題だと思います。

2. 決勝トーナメントが消えた

昨日は一つうれしいことがありました。ここに(前日の試合のプログラムの)「なでしこジャパン連覇への挑戦」という記事がありますね。これはなでしこの記事が問題なのではなくて、ここに FIFA 女子ワールドカップカナダ 2015 の組み合わせが書いてあって、その組み合わせの大会概要に試合のやり方が書いてあります。試合のやり方のところに、各大陸予選を勝ち抜いた 23 チームに開催国のカナダを加えた 24 チームを、6 グループに分けてグループステージを実施して、そのグループの上位 2 チームずつと 3 位の成績上位チームの 4 チームがノックアウトシステムに勝ち上がる、と。従来メディアによってはこれを「決勝トーナメントに進出する」と書いてあるんですけども、日本サッカー協会の刷り物としては、グループリーグをやったあと勝ち上がっていく試合は「ノックアウトステージ」

ということになったわけです。

これは世界共通の言葉なんです。これをトーナメントと言っているのは明らかに間違いで、トーナメントというのは、日本なら日本で一つの大会をやる、オリンピックのなかのフットボールトーナメントという言い方はあるんですけど、その中にはリーグ戦もありノックアウトシステムもあるわけですね。高校野球のようにいきなり一発勝負で負けたら終わりというのは、負けたら終わりですからノックアウトされるわけで、英語ではこれをノックアウトシステムと言うのです。これをトーナメントと言うのは、大会をトーナメントと言うのを何かのはずみで間違っ、ノックアウトシステムをトーナメントと同じだと思っ込んでしまっている節があるんですね。

それを以前から日本サッカー協会に申し入れて、間違わないようにということを書いてきました。これからの協会の刷り物は必ずノックアウトシステムと書いてありますからよくご覧になっていただきたいと思います。メディアの方ではまだ間違っそのまま使っているところもありますけれど、それはとりたてて言っても仕方ないわけで、我々としては協会が間違っ使わないようにしてもらおうということですね。まだ協会の中にも、ノックアウトシステムとトーナメントとごっちゃにしている人もありますが、徐々に慣れてくると思います。これがプログラムにおいて明らかに進歩したところ、うれしいことです。

3. サッカーの見方

昨日の対戦相手はチュニジアでした。チュニジアは日本と縁がありまして、日本では1979年にブラッターさんが来た第2回ワールドユースを開催しましたが、第1回はチュニジアでやっっているんです。チュニジアは昔のカルタゴですよ。この間チュニスの博物館で酷い事件がありましたけれど、なんで皆あの博物館を見に行くかいうと、カルタゴ時代の物や遺跡があるから行くわけですね。ここへ一言、昔のカルタゴだということを入れれば、サッカーに対する別の興味も出てくると思うんです。

サッカーをどんどん盛んにするためには、そういうところから皆に興味を持ってもらいたいと思っながらやっってきたわけですね。近頃は盛んになってしまったものですね、そんなこと書かなくてもサッカーのことさえ書いていけばいいと言う傾向になりましたね。そのかわり僕よりはサッカーだっぶん詳しいですよ。実際、メディアの皆さんは非常によく勉強してまっす。ですけど3-4-3のシステムがどうだとか、誰と誰がどうしたとかね、それも大事なことですけど、フットボールというのはそういう世界的な広がりのおもしろさがあるということ、いつも繰り返し、繰り返し、皆さんに紹介するの、記者の一つの役目だろうと思っるんです。これは年寄りの冷や水、ということにはなるでしょうね。

昔僕らがプログラムを作る連中に頼んだのは、その国のことを少しでも書いてください、ということでした。その街のことを少しでも書いてください、その街のクラブの選手が国の代表になって来るわけですね、その国の背景をちょっとでも書いてください、それが子供たちの世界への興味になるわけですね。協会の専務理事から早稲田の教授になった平田（竹男）さんは、大手前高校のときに僕の「ワールドカップの旅」を読んで、サッカーの広さが面白くなっ、通産省ではブラジルで立派な仕事をしたんですけど、やっぱりサッカーが好きだからブラジルでも仕事できたんですよ。彼はその後早稲田で新しいスポーツ科学の分野を拓きました。そういう人も出てくるわけですね。やっぱり世界への興味はひとつのヒントになったと思っます。そこにサッカーいわゆるフットボールというスポーツの面白さが沢山あるわけですね。

今、本屋さんへ行ってご覧になったら驚かれると思いますけど、サッカーの本だけでこの幅ぐらいの本棚一つあります。皆新しい本でね、すごいですよ。僕が1冊本を出したのは去年のことです。それまで本を出す間はなかったんですけど、それは別としてもフットボールという競技は誰もがちょっと関われば書いてみたくなる。それがやっぱりサッカーの面白いところなんです。誰にでもわかりやすいんです。自分が知っていることは人が知らないだろうと思って書くんですね。昔、子供の頃によく言われましたけど、象の鼻をなでて「象というのは蛇みたいなものだ」と、象の足をなでて「象と言うのは大木だ」と言う笑い話がありますけど、フットボールというのはまさにそれで、僕も「俺はしっぽだけ見てるのかな」と思ったりすることもあります。

サッカーと言うのはそれくらい大きくて、面白くて、どこを切り取っても話のタネになるものだからね。サッカーの本がどれだけあるかご覧になれば、サッカーってそんなに面白いのか、と思われるでしょう。ひとりひとりが皆面白いと思って書いているわけですからね。おかげさまで私がここの部屋を借りて、2階でサッカー文庫をやり始めてびっくりするのが、「よう世の中にこれだけサッカー好きな人がおるなあ」ということですね。僕が言うんだから間違いありません。本当に皆さんサッカーが好きでね、そういう人が日本にこれだけ増えてるんだと、これだけたくさんおられるんだと驚きました。

4. 蹴球からサッカーへ

90年ずっとサッカーばかりやってきたのかというと、そうじゃなくて、多少は仕事もしてるんです(笑)。どういう人生だったか取材されることが多くなって、なにかのときにまとめていた方がいいと思ったりしました。皆さんのお手元に、「昭和14.15.16年のころ 神戸一中43回 賀川浩」という刷り物があります。これは私の神戸一中の3年生から5年生だったころの自分を中心に書いた神戸一中のサッカー史です。もうひとつ「赤トンボと号隊始末記」というのがあります。「赤トンボ」というのは昔の陸軍の練習機で、落ちてもすぐ見つかるように赤い色に塗ってあります。その練習機で「特攻へ行け」ということになって、飛行隊に入ったときのことも書いてあります。ここにいらっしゃる方、何人かは戦争の経験がある方もいらっしゃるかもしれませんが、ほとんどの方は経験がないでしょうから、参考にお渡しますのでまた読んでみてください。

子供の頃、サッカーは「蹴球」と言いました。中国人がフットボールを「足球」と訳しましたが、日本人がこれを「足球」と訳さないで「蹴球」と訳したのはおそらく「蹴鞠」というものが残っていたからではないかという説があります。多分それは当たっていると思います。サッカーは「アソシエーションフットボール」ですから神戸一中では「ア式蹴球部」と言っていました。実際には神戸一中では「蹴球部」と言えばサッカーの部のことで、ラグビーはラグビー部と言っていました。

戦前の日本の新聞も「蹴球」というのを使っていたんですが、戦争が終わって、難しい字を覚える暇があったら他の勉強をした方がいいんじゃないかということから当用漢字ということで、漢字を整理することになり、それで「蹴」という字はなくなりました。そのために新聞が一番困ったのは今まで「蹴球」と言っていたのをどうするか、ということで始めは「フットボール」にしよう。「フットボール」と言ったら今度はアメリカの検閲係が「アメリカでフットボールと言ったらアメリカンフットボールのことだ、サッカーのことじゃない」ということになって、サッカーと言うのが一番適当だろうというので新聞社が使い出したんですよ。そこから一般に広がって、長い間日本蹴球協会と言っていたのが「日本サッカー協会」になりました。

神戸の小学校では夏は野球、冬は蹴球で、いくつかの学校ではサッカーの試合をすることもありました。僕らの小学校4年生、5年生のときは対外試合はありませんでしたけども、校内ではよく試合をしていました。職員チームとも試合をしたりしたこともあったし、カナディアンスクールとも試合をしました。カナディアンスクールは同じ学年でも体が大きいものですから、なかなか大変でしたね。

旧制中学では大正7年から日本フットボール大会が始まって盛んになります。僕たちも中学のときは一生懸命やりました。その一生懸命やったことがそこに書いてあるんですけど、神戸一中（現神戸高校）は大正14年ぐらいから非常に強くなってですね、技術も上がって全国優勝もするようになったものですから、その先輩の伝統を守らなくちゃいけないということで練習もしっかりやったつもりです。

そのときに歴代優秀な先輩が出ましたけれども、その優秀な先輩の中には戦争で亡くなった方もたくさんありますし、今もしおられれば日本代表に比べても引けを取らない、あるいはもっと上手かったかなあという選手もおられたんですが、そういういい先輩に恵まれて私もサッカーを一生懸命やってきました。そして中学5年生の11月に神宮大会という全国大会があって朝鮮地方代表の普成中と2-2で引き分け、両校1位ということで終わりました。

1967年メキシコオリンピックアジア地区予選の日韓戦で、韓国とは3-3で引き分けて、日本が最後にベトナムに勝ってオリンピックに行って銅メダルを取るんですけども、この間調べてみたら、そのときの韓国のヘッドコーチの張慶煥という人がどうも僕が16年に2-2の試合をして引き分けた普成中学にいたそうです。後で知って、今もし生きていれば90近いですから多分生きてないと思いますが、生きているうちに会いたかったなあこのごろ思っております。対戦相手としても朝鮮半島から良いチームが来ましたし、それと試合をすることはものすごく面白くて、目一杯やれたという意味で私たちは戦前の最後の非常にいい時代に恵まれたと思います。

5. 赤トンボと号隊始末記

「赤トンボと号隊始末記」の「と号隊」というのは、大戦の末期の陸軍の航空部隊での略称です。「爆撃隊」というのは飛行機で飛んで行って爆弾を落として退避する、相手の船にぶつける、あるいは地上部隊に当てて逃げる、あるいは水雷攻撃だったら魚雷をぶつける、いろいろあるわけです。「特別攻撃隊」は何が特別かと言ったら爆弾を落とさないでそのままぶつかるから特別だ、と。

飛行機は事故があったらほとんど終わりみたいな物騒な乗り物ですけど、それでもやっぱり軍隊といえども、飛行機は安全にというか爆弾を落として帰ってくるということになっていました。それを自分で落とさないでそのまま突っ込んでいくということを始めて「特別攻撃隊」ということになったんですね。それを陸軍は大戦の末期になると略称で「と号」と呼び始めました。と号隊の戦闘要領というものに、「と号部隊ノ目的ハ航行マタハ舶地ニ於ケル敵艦船艇ニ轟進衝突シ、コレヲ必沈シテ敵ノ企図ヲ覆滅シ、以テ全軍制勝ノ根基ヲ確立スルニアリ」と、そこだけ覚えてるんですが、目的と言うのが「爆弾を落として当てて来い」というのではなく、「轟進衝突」ですから「轟進して衝突せい」というそれがこのと号隊の目的なんですよ。

私は陸軍の飛行機乗りになって8カ月ほどして、昭和19年の3月に北朝鮮、海州（ヘジュ）の飛行場に移り、轟進衝突する練習をやっていました。1番成績のいいのが戦闘隊、その次が爆撃、操縦が

だめだったら偵察に回る。僕は多分戦闘機になるかと思ったらそうでなくて、もう一つ別の組があって、それが「と号」でした。第5航空軍というのが中支・満州から朝鮮半島一帯の管轄で、その第5航空軍の中から本土決戦用の特別攻撃隊を選抜すると、そのなかにはもちろん上等の飛行機の四式戦の特攻隊もあれば、私らのように操縦の技術の低いものは練習機で行け、ということで赤トンボで行くことになった者もあり、その練習をさせられたわけです。

その赤トンボの私の部隊の名前が413飛行隊。6人の隊員で、6機編隊で、2機ずつが一組になって行くわけです。6機で一隊です。隊長になったのは我々と同じように学生から兵隊へ来て、歩兵から飛行機乗りになった川上晃良でした。5人の隊員と隊長の6人で写っている写真がありますが、一番のっぴの男が隊長で、当時の日本のロッククライミングでは十指に入るすごいクライマーだったんです。軍隊に入る前にはヒマラヤのK2に登りたいと思って、自分たちで一生懸命金を貯めたのに、兵隊にとられて行けなかったというエピソードの持ち主で、それはなかなか軍人としてもいい将校でした。

「賀川浩、第413飛行隊付きを命ぜられました」と申告したら、川上隊長は「ご苦労さん、ことしの西瓜は食えないからナ」ということを言いました。5人の学生から来た見習士官と、同じく学生出身の山登りの隊長とは家族みたいな感じでした。のちに6人1隊のそれぞれの隊の技術向上のために、合宿つまり合同演習をやろうということになりました。初めは沖縄に間に合うのかと思ったけど、もう沖縄へはお前たちの腕で今からいくらやっても間に合わんと、だからお前は本土決戦用だということになって、6人の隊が12隊、72人いたかな。

おかげであの赤トンボの飛行機に関しては、誰に文句を言われても一人前以上の腕は身についたと思います。陸軍の飛行隊にいて、そういう合同練習などをしたことで、サッカーの指導、技術練習というのはどういうものかもよくわかりました。

昔風の練習で怒鳴ったり叱ったりすることが多く、陸軍でももちろん飛行機乗りでもなんでもぼかぼか殴りますけど、やっぱり技術を上達するためにはほめるのが一番いいということが自分でもわかりました。自分が飛行機の技術を自分で「今日はものにしたな」と思ったのは、昭和19年の秋に一緒に乗ってくれた将校が、すごい年期の入った将校でその人と一緒に乗って編隊のコツを黙って教えてくれるんですけど、そのときのあうんの呼吸の指導の仕方というのがね、僕自身はもうそのころ、学生するときでも後輩にサッカーを教えたりしていますから、その何とも言えん教え方の上手さに驚嘆をしました。

黙ってて、大きな声でも怒鳴りませんし、何もしないんですけども、ダメなときはダメ、それはもう本当に感心しました。陸軍では、ちょっとそのへんの物を積むのに「この端がちゃんと合っていない」というだけで人をひっぱたくところがあったんですけどね、そういうつまらんことを言っているよりも、やっぱり技術を大事にして教える方がずっと効果があるということはやっぱりわかりました。これは帰ってからの、サッカーの指導にもものすごくプラスになったと思います。

そのなかにひとつエピソードが書いてあるんですが、僕の隊にいたのが急降下攻撃の演習をしましてね。ちょうど師団長が査閲と言ってどれだけできるか見に来ているわけです。前田という見習士官が、方向を間違えてこっちに来て、テントがあるんですが、突っ込んできた飛行機がテントにはぶつからないで、テントの向こう側へ隠れたわけです。飛行機が隠れたから、「地面にぶつかった」「やっ

た」と思ったら、ぐぐっと上がってきました。一番おもしろかったのは参謀連中がいっぱいいいて、その連中が前田の飛行機がほとんどぶつかりかけたら全部逃げ出しましてね。さすがに師団長はじっとしていましたね。腰をちょっと浮かせてだけで。その後、その前田が演習が終わって降りてきて、報告するわけです。「前田見習士官、急降下攻撃終わりました」。いくら演習でも、ぶつかる寸前まで高度低くすることは違反ですからね。引き上げ行動を間違ったんですよ。そしたら則安少佐が言うのは「前田見習士官、貴官はどこまで降りたと思うか」と言ったら、「操縦桿を引き上げた時に、左手に格納庫の屋根が随分上の方に見えた」と言ったんです。「あいつなんちゅうことを言うんや」と思ったら則安少佐は「それくらい落ち着いていればよろしい」と。それで終わりですよ。そこがやっぱり特別攻撃隊のいいところで、そこでいくらひっぱたいたってしょうがないわけですからね。そこで本人は良く分かっているわけですから。そういう技術教育の面白さというのを、その時はよくわかりました。前田は体が弱くて、演習がきつくなるとほとんど食事も通らないようで、そういう体力的な問題もあったかも知れません。

演習が終わって、整備して、いよいよ僕たちは朝鮮半島南西端の木浦の方へ出る予定だったんですけど、その命令が出るまでにソ連が北から入ってきて、いろいろドンパチやりながら、混乱し始めた8月15日に戦争が終わりました。もう演習も終わりだし、死ぬこともないんだということで、10月の中旬に帰ってきました。神戸の家は6月5日の大空襲で丸焼けになったということは知っていましたから、朝鮮から復員して帰って来たときには、まず京都の伯父の家に引き上げたんです。帰って1週間もしないうちにサッカー部の仲間から葉書が来て、「生きとったらしいな、兄貴も生きとってよかったな」と。うちの兄貴も海軍で零戦に乗っていて千歳で特攻隊になっていましたから、それももう帰ってきて、「10月に西宮で集まるから、バッグ持って来い」というのが関西でのサッカーの復活の葉書でした。

その日行ったらみんな「あいつは死んだんやろか」「いやあれはまだおるぞ」とか、うっかり「あいつは確か飛行機やから死んでるはずや」と言ったら西宮のスタンドの下のほうから「ほれ生きとるぞ」と言って上がってきたりするようなことがあって、皆再会したわけです。本当に戦争で苦勞した先輩たちには申し訳ないけど、僕はちょっと手伝いに行って戦争の端くれで、もちろんぶん殴られもして多少の苦勞はありましたけど、まあまあ体も傷めずに飛行機に乗って、いろんな面白い技術習得の過程を経験して、夜間飛行で真っ暗なところを一人で飛んでいるような寂しさも多少味あわせてもらって、今となっては、自分にとって非常に貴重な経験をしたと思っています。

6. デットマール・クラマー

デットマール・クラマーという日本サッカーを一人前にするのにものすごい功績があった優秀なドイツ人のコーチがいますね。デットマール・クラマーは僕より半年若いんです。クラマーは十代でドイツで軍隊に入りましたからね。若いのに僕らより実戦の経験があって、彼はパラシュート部隊でクレタ島からサハラ砂漠の戦線に出て非常に苦勞したわけです。中条（一雄）さんという僕より2年ぐらい下の朝日新聞にいた記者が、彼は日本の新聞記者で最初にクラマーに会った男ですが、非常に熱心にデットマール・クラマーのことを調べて、立派な本を出しました。

それを読みましたらね、2000年に彼が取材に行ったら、クラマーが急に軍隊時代の話をしてびっくりしたと書いてある。それは、たまたま僕が2000年にクラマーが中国にいるときに会いに行っている話をしたときに昔の話が出て、クラマーは長沼や岡野相手では軍隊の経験が無いものだからそんな話は出ないんですが、僕とクラマーはひとつしか変わりませんし、お互いにそういう経験がある

ものですから、会うと軍隊の話、昔の話をよくするんです。

2000年のときにも、たまたまドーハの悲劇の話になって、あの時の日本代表は、あと45分とにかくがんばったら勝てると思って、ハーフタイムに皆完全に頭の中が真っ白になったという話があったんですね。当時の関係者が僕に「あの時は監督もコーチの私も皆わけがわからなくて、完全にあがってしまって大変だったんです」という話をしてくれたものですから、その話をクラマーにしたなら、そんなもんで舞い上がってしまうなんて考えられない、と言う話をあんまりするもんだから、「クラマー、そういえば、君や僕はサッカーよりもっとひどい経験もしているからな」とぼろっと言ったら「まあそういえばそうだな」ということを言いました。

彼は落下傘部隊でクレタ島作戦に参加し、そのあとサハラ砂漠では同盟軍に入ってイギリスの連中と塹壕戦であの暑い日差しの中で一日中暮らしているわけです。その時の話をクラマーに聞くと、「一日にコップに一杯ずつ水が配給される」と。古い兵隊はコップ一杯配給になったら布に浸して何時間かしがんでいる、新しい兵隊はカッと飲んでパッと汗になっちゃうと、全然経験がないとこういうことになると言っていました。

そんな話をしながらクラマーは、「自分がパラシュート部隊の指揮官の教育を受けるために士官学校に入ったときに、そのときの隊長に言われたのは『自分がカッとなってると思った時は、兵隊に向かって何も言うな』と、どうすればいいかと言うと『森に向かって怒鳴れ』と教えてくれた」と。これはドイツのことに詳しい方は皆ご存じですけど、森というのはドイツ人にとってはひとつのシンボルですよ。ドイツは非常に森が多いんです。僕はそのときクラマーを「森に向かって怒鳴れ、ああやっぱりお前ドイツ人やな」と思いました。

そういう話があったあとで中条君が行ったものだから軍隊の話が出たんだろうと思うんです。その本を読んだらちょっと唐突に思うんですけど、それは僕とクラマーで同年輩同士そんな話をしたからでしょうね。クラマーも今までそんなこと言わなかったんですけど、2000年に北京から何百キロか離れた秦皇島の中国足球学校に彼を訪ねたときにその話をしたことを覚えています。

戦前・戦中のこと、戦後にサッカーがどんどん盛んになっていったことはいろんなところで折りに触れて書いてきて、そしてまた私のインターネットのホームページにもたくさん書き込んであります。また疑問があればいつでも賀川文庫の方へ問い合わせに来ていただければと思います。

以上